

モンゴル帝国のカトン

——帝国の政治を動かした女性たち——

宇 野 伸 浩

は じ め に

モンゴル帝国において統治者であるカン〜カアンは、イルハン国のサティ・バグという唯一の例外を除けば、すべて男性であった。統治者の婚姻は一夫多妻制であり、そのため宮廷には複数のカトンがおり、第一カトン、第二カトンというように序列があった。カトンたちは各自が天幕の宮廷を持ち、そこに所属する人員がおり、財産も所有していた。また、カトンの下には一段身分の低い側室も数多くいた。

近年、欧米と日本においてモンゴル帝国のカトン研究が盛んになりつつあり、Lambton、小野浩、Judith Pfeiffer、Bruno de Nicola、Anne F. Broadbridgeらの研究がある（Lambton 1988、小野 2010、Pfeiffer 2014、De Nicola 2017）。その中で、Broadbridgeの著書 *Women and the Making of the Mongol Empire* は、本格的なモンゴル帝国のジェンダー史を意識して書かれたものである（Broadbridge 2018）。

私は、かつて歴史人類学的研究として、チンギス・カン一族の婚姻関係と遼朝皇族の婚姻関係を、「交換婚」という概念を用いて分析したことがある（宇野 1993、宇野 1999、Uno 2009）。その論文は、カトン研究あるいはジェンダー史として書かれたものではないが、幸い近年のカトン研究の中で先行研究として引用されている（Broadbridge 2018, pp. 29, 39, 49, 108）。

近年のカトン研究では、Pfeifferが、モンゴル帝国の宮廷ではカトンの地位が高く、帝国の政治に女性も関与できたことを指摘している（Pfeiffer 2014）。しかし、一般にモンゴルの遊牧社会は、遊牧民の生活の中で、牧畜

労働における男女の役割分担がはっきりしており、家庭内においては父親の権限が強い。モンゴルの社会は、ジェンダーとしての男性と女性の位置づけが明確に異なる社会であり、女性の地位が必ずしも高くはない社会であるように見える。では、モンゴル帝国時代の女性の政治的活動は、どのように考えたらよいのであろうか。Peter Jackson がモンゴル帝国時代のエリート女性が享受した「自由」を認めながらも、強調しすぎてはいけなさと警告を発していることは傾聴に値すると思う (Jackson 2017, pp. 106-107)。

1. 即位場面の玉座を描いたミニアチュールと第一カトンの地位

ペルシア語史料『集史』は、モンゴル帝国史研究の基本史料である。その挿絵は、美術史の研究者によっても研究されてきた。その絵の中で近年注目されているのは、即位場面を描いたミニアチュールである (Komaroff 2006, p. 509; Melville 2017, pp. 230-241; Kadoi 2017, pp. 241-275)。その即位場面のミニアチュールでは、玉座にカン〜カアンとともに第一カトンが座っている。世界の多くの王国、帝国では、玉座は王、皇帝だけが座る場合が多い。では、玉座に第一カトンも座ることが、モンゴル帝国の宮廷において、女性の地位が高いことを示す証拠になるだろうか。

モンゴル帝国において、次代のカン〜カアンの選出など国家にとって重要な決定をするときに開催されるクリルタイには、カトンも出席することが認められていた。その点では、カトンにも政治への関与が認められており、地位が高かったと言えるのかもしれない。

しかし一方で、上述の玉座のミニアチュールは、必ずしもカトンの地位が高いことを示しているとは言えないと思う。なぜなら、この絵が示しているのは、複数のカトンたち、その下にいる側室たちのなかで、唯一第一カトンだけがカン〜カアンの横に坐ることができること、つまり第一カトンが他のカトンや側室よりも圧倒的に地位が高いことを際立たせている絵とも解釈できるからであり、これらの即位場面を描いたミニアチュールは、

第一カトンの地位の高さを明示している絵と解釈することもできる。

モンゴル帝国や諸ハン国においては、原則として、第一カトンから生まれた息子たちの中から次のカン〜カアンが選出された。この原則が第一カトンの地位の高さの根拠であったと思われる。ただし、第一カトンに子供がいないとき、あるいは、第一カトン以外のカトンの息子がクーデターを起こして実力で権力を奪ったときなど、原則が崩れる場合があった。

2. 女性が帝国の政治を動かすとき①：トレゲネ・カトン

トレゲネ・カトン (Töregene Qatun) は、モンゴル帝国第2代オゴデイ・カアンのカトンである。トレゲネ・カトンについては、すでに多くの研究があり、基本的な事実はすでに論じられ解明されている (ドーソン 1968, pp. 214–215; 蔡美彪 1989; 杉山 1996, pp. 92–95; 杉山 1997, pp. 421–422; de Rachewiltz 1999; De Nicola 2017, pp. 66–72; Broadbridge 2018, pp. 164–194)。モンゴル帝国では、多くの第一カトンを輩出した名門姻族として、コンギラト族とオイラト族が有名であったが、トレゲネは、このどちらの部族の出身でもなく、『元史』定宗紀によれば「乃馬眞氏」の出身であった。彼女は、最初ウハズ・メルキト族のタイル・ウスンと結婚したが、メルキト族がチンギス・カンとの戦いに敗れたとき、戦争捕虜としてオゴデイの宮中に入り、オゴデイ・カアンのカトンとなった¹⁾。オゴデイの第一カトンのボラクチン・カトンには子供がおらず、またオゴデイがレヴィレート婚によりチンギス・カンの妻の中から娶ったモゲ・カトンにも子供がいなかった。一方、トレゲネにはオゴデイとの間にグユク、コテン、ク

1) 『集史』オゴデイ・カアン紀によれば、トレゲネは第二カトンであるが、『元史』「定宗紀」には「母曰六皇后」とあるので、杉山1997はトレゲネを第六カトンとし、『集史』で第三カトンであったモゲ・カトンを第二カトンとする (杉山 1997, p. 422)。一方、Rachewiltz は『元史』の「六皇后」を「大皇后」の誤りとし、トレゲネを第二カトンとする (de Rachewiltz 1981, pp. 42–43; de Rachewiltz 1999)。蔡はRachewiltz 説に反対し、『元史』「定宗紀」以外の箇所にも「六皇后」とあることを根拠にトレゲネを第六カトンとする (蔡 1989; 蔡 2012, pp. 290–294)。

チュ、カラチャル、カシの5人の息子がいた。オゴデイは、最初後継者としてトレゲネの子の第3子クチュを選んだが、クチュが若くして遠征中に亡くなったため、クチュの息子シレムンを後継者として選び、第一カトンのボラクチン・カトンの宮廷で育てさせていた。

オゴデイ・カアンが1241年に死去したとき、相前後してボラクチン・カトンが1241年に、モゲ・カトンが1242年に亡くなったため、トレゲネにチャンスがまわってきた。次のカアンの即位までの期間、トレゲネが摂政として実権を握ることになったのである。トレゲネは、オゴデイ・カアンの死後、一族に相談することなくすぐに権力を掌握したが、その後、次の史料1に述べられているように、オゴデイの兄チャガタイや他の皇子たちは、トレゲネが次のカアン候補者たちの母親であるために、彼女が摂政として国事を代行することを認めた。

(史料1) チャガタイと他の皇子たちは、人を派遣して、トレゲネ・カトンはカンにふさわしい息子たちの母親であるので、クリルタイが開催されるときまで彼女が国事を整えるように、新旧のヤサが法であるところのものから逸脱しないよう有能な人たちがそのまま御前に居るようにと伝えた。(『世界征服者の歴史』 Juwayni/Qazwini, p. 196, Juwayni/Boyle, p. 240)

オゴデイの死後、権力を掌握したトレゲネが望んだのは、孫のシレムンの即位ではなく、自分の息子である長子グユクの即位であった。トレゲネはクリルタイで他の王族を説得し、グユクを即位させることに成功した。

このように、トレゲネが女性にもかかわらず実権を一時的に掌握したのは、彼女自身の政治力によるのではなく、彼女が死去したオゴデイ・カアンのカトンであるとともに、次期カアン候補者たちの母親だったことが主たる理由であり、またライバルとなる二人のカトンが死去したことも有利

に働いたと考えられる²⁾。

3. 女性が帝国の政治を動かすとき②：オルクナ・カトン

次に、カトンが権力を掌握した事例として、チャガタイ・ウルスのオルクナ・カトン (Orqina Qatun) をとりあげたい。オルクナ・カトンについては、多くの研究で言及されており、基礎的な史実はほぼ解明されている (ドーソン 1968, p. 290; Allsen 1987, pp. 30–34; 杉山 1996, pp. 152, 157–158; 杉山 1997, pp. 430–431; 杉山 2004, pp. 76, 290, 292, 294; Biran 2009, pp. 48–49; De Nicola 2017, pp. 76–82; Broadbridge 2018, pp. 244–250)。

オルクナ・カトンは、チャガタイの孫カラ・フレグのカトンであり、名門姻族のオイラト族の出身であった。そして、オルクナ・カトンの母親は、オイラト族に嫁いだチンギス・カンの娘チチェゲンであり、チンギス家とオイラト族アルチ・ノヤン家との間の交換婚により、チンギス家に嫁ぎ返した女性であった。このことは、彼女が両家にとって特別な存在であったことをうかがわせる (宇野 1999, pp. 18–19)。

チャガタイ死後のチャガタイ・ウルスの統治者の地位は、大カアンのおもわくなど外部の影響をたえず受けたため、不安定な状況にあったが、そのなかにあつて、オルクナ・カトンは粘り強く行動し、自ら権力を掌握した時期をはさみながら、最後は息子をチャガタイ・ウルスのカンに即位さ

2) グユク・カンの死去後に摂政として国事を任されたのは、『集史』グユク・カン紀の次の記事にあるように、グユクの第一カトンのオグル・カイミシであった。「グユク・カンの死後、諸道を閉鎖し、次のようなヤサクを發した。「到着した場所にいる人は誰でも、農耕地でも荒野でも、とどまるように」と。オグル・カイミシの命令で、グユク・カンの墓を、彼のオルドがそこにあったエミルの岸に移転した。ソルククタニ・ベキは、慣習どおりに、彼女に慰めの言葉とともに、衣服とボクタクを送った。パトゥも、このように慰めの言葉を与えてから言った「オグル・カイミシが、以前の状態のまま、チンカイや国の重臣たちと協議して、国益を実行し、軽視しないように。なぜなら、私は衰弱と老化と足の痛みのために移動することができないからだ。お前たちイニたちがすべてそこに来て、必要なことを始めてください」と。」(『集史』グユク・カン紀, Rashid/Rawshan, p. 810; Rashid/Topkapi 1518, fol.184a; Rasid/Boyle, pp. 185–186)。

せることに成功した。以下に具体的に見ていきたい。

第3代グユク・カアンはチャガタイの息子イス・モンケをチャガタイ・ウルスのカンとして送り込んだが、1251年、第4代モンケ・カアンが即位すると、モンケは、チャガタイ・ウルスをチャガタイの孫カラ・フレグに統治させようとし、カラ・フレグにイス・モンケを殺すよう命じてチャガタイ・ウルスに向かわせた。ところが、カラ・フレグはチャガタイ・ウルスの領地に到着する途中で亡くなった。カラ・フレグの死後、夫に代わり、イス・モンケを殺してチャガタイ・ウルスのカンの地位に就いたのが、彼の妻オルクナ・カトンであった。オルクナ・カトンは、息子のモバーラク・シャーが幼かったため、息子に代わってチャガタイ・ウルスを統治した。その後、1261年、アリク・ブケがチャガタイ家に送り込んだチャガタイの孫アルグに実権を奪われるが、アルグと結婚することによりその状況を凌ぎ、アルグの死後、再び実権を掌握し、1266年、ついに息子のモバーラク・シャーを即位させることに成功した (Rashid/Rawshan, pp. 767-769; Rashid/Boyle, pp. 149-151)。

前述のトレゲネ・カトンと比較すると、共通点は、かつて統治者あるいは統治者候補であった男性の寡婦であること、次期統治者候補の息子がいることである。このような状況が、女性が一時的に権力を掌握することを周囲が認める条件であり、そのような政治文化がモンゴル帝国にあったと考えられる。

4. 女性が帝国の政治を動かすとき③：ソルカクタニ・ベキ

モンゴル帝国において、政治的な影響力を持ち重要な役割を果たした女性は、上述のトレゲネ・カトンやオルクナ・カトンのように一時的に権力を掌握した女性だけではない。権力を掌握した時期はないが、モンゴル帝国の政治に大きな影響力をもったのは、ケレイト族出身のソルカクタニ・ベキ Sorqaqtani Beki である。ソルカクタニ・ベキは、モンゴル帝国の宮廷女性の中でもっとも名声が高く、モンゴル帝国の命運を担って政治的に行

動し、帝国の安定のために重要な役割を果たした (Allsen 1987, p. 60)。Broadbridge は、勝者のソルカクタニ・ベキと敗者のオグル・カイミシの比較という観点で両者を分析しているが、ここではそれとは異なり、ソルカクタニ・ベキがライバルとなる勢力に対してどのように対応したかという観点から分析してみたい。なお、カトンやカトンが所有するオールドの経済的基盤の分析は重要なテーマであり、すでに松田、野沢、De Nicola の研究があるが、本論文の目的とは若干異なるのでここでは取り上げない (松田 1980, pp. 38-40; 野沢 1988, pp. 53-63; De Nicola 2017)。

(1) 経歴

ソルカクタニ・ベキは、チンギス・カンの第四子トルイのカトンである。彼女はチンギス・カンが滅ぼしたケレイト王国の王族出身のキリスト教徒の女性であり、1203年ケレイト王国滅亡後に、トルイと結婚した。トルイと彼女の間にはモンケ、クビライ、フレグ、アリク・ブケの4兄弟が生まれた。ソルカクタニ・ベキについては、多くの研究があり、基礎的な事実はおおむね明らかにされている (ドーソン 1968, pp. 266-270; 杉山 1996, p. 96; 杉山 1997, pp. 412, 423; Kim 2005, p. 332; De Nicola 2017, pp. 72-74; Broadbridge 2018, pp. 195-224)。

(2) 夫の死と再婚の拒否

ソルカクタニ・ベキの夫トルイは、1232年に40代半ばで病死した。そのとき、モンゴル帝国の第2代カアンであったのは、トルイの兄オゴデイである。寡婦となったソルカクタニ・ベキを待っていたのは、様々な試練だった。次の史料2のように、トルイの兄オゴデイ・カアンは、モンゴルのレヴィレート婚の習慣によって、寡婦ソルカクタニ・ベキ (おそらく40歳代) に、息子グユクとの再婚 (叔母一甥婚) を求めたのである。しかし、彼女は4人の息子を育てるのが自分の務めだと言って断った。

(史料2) オゴデイ・カアンは、ソルカクタニ・ベキに、自分の息子グ

ユク・カンと結婚することを求めた。その要件のために、...を使者として派遣した。カアンのヤルリク³⁾を送ったとき、彼女が次のように答えた。「ヤルリクの命令にどうして違ふことができますか。しかし、この子供たちを、一人前の男になり独立するまで養育し、彼等が礼儀正しくなり、お互いに離れてバラバラになって嫌いにならないように、彼等が一致して事が成就するようになるまで努力するというのが私の考えです」と。

彼女が、グユク・カンに対して（結婚を）望まず、そのようなうまい口実でその言葉を斥けたので、彼女に再婚したいという欲求がないことは疑いなかった。この点では、彼女はチングス・カンの母親ホエルン・イエケより優れている。（『集史』トルイ・カン紀, Rashid/Rawshan, pp. 792–793; Rashid/Торкари 1518, fol.180a; Rashid/Rampur 1820, p. 73; Rashid/Российская PNS46, fol.199b; Rashid/Boyle, pp. 169–170)

(3) チングス・カン家内の対立の回避

次にソルカクタニ・ベキを待っていたのは、別のトラブルである。建国者チングス・カンが直接支配していた多くの民は、モンゴルの末子相続の制度に従ってトルイ家が相続し、トルイの死後はソルカクタニ・ベキが管理していた。ところが、オゴデイ・カアンは、チングス・カンの取り決めに反して、彼女の管理する民のうちから3千戸を自分の息子グユクに与えたのである（Kim 2005, p. 332）。怒ったトルイ家の家臣は、オゴデイ・カアンに直接抗議するよう彼女に訴えた。しかし、次の史料3に述べられているように、ソルカクタニ・ベキはオゴデイ・カアンの意向に沿うように家臣を説得し、家臣たちはそれを受け入れた。このようなソルカクタニ・

3) 「カアンのヤルリク」はラーンプル・ラザ図書館1820写本、ロシア国立図書館PNS46写本など初版の写本では「オゴデイのヤルリク」となっている。ここでは、第二版のトプカプ・サライ1518写本などに基づき「カアンのヤルリク」とする。

ベキの忍耐強い努力によって、トルイ家とオゴデイ家は、正面から対立することなく、とくにオゴデイの第2子コデンとは友好関係を維持することができたのである（本田 1953, p. 17 注25; 本田 1991, p. 27 注25; 松田 1980, p. 39）。

（史料3）オゴデイ・カアンがカアン⁴⁾となったとき、イェケ・ノヤン（＝トルイ）の子供たちに属していた軍全体から、イルガイ・ノヤンの兄弟であり、スニト族出身のアミールであるトゥラダイ・バウルチを、スニトの軍1千戸と、スルドス族の2千戸とともに、自分の考えで、皇子たちやアミールたちに相談することなく、自分の息子コデンに与えた。

ソルカクタニ・ベキと皇子たちに仕えていたチンギス・カンの大アミールたち、たとえば、チンギス・カンが5番目の息子と呼んだタタル族出身のシギ・クトゥク、スルドス族出身のストウン・ノヤン、マングト族出身のジェデイ・ノヤン、ジャライル族出身のモンケサル・コルチ、ビスト族出身のプトウジン・コルチ、バヤウト族出身のクビライ・コルチ、コンコタン族出身のイスル・コルチ、他の万戸・千戸のアミールたちが、一緒にソルカクタニ・ベキとモンケ・カアンと彼の兄弟の前で次のように申し上げた。「私たちに属しているこのスルドスとスニトの軍を、今、オゴデイ・カアンが自分の息子のコデンに与えようとしています。チンギス・カンがオールドとともに分配したもので、我々はどのように黙認して彼の命令に違反するのですか。このことをオゴデイ・カアンの御前で、どのようにおっしゃるかとおっしゃるかとおっしゃるのかと申し上げます」と。

ソルカクタニ・ベキは答えておっしゃった「あなたたちの言葉はた

4) トプカブ・サライ1518写本など第二版の写本では「オゴデイがカアンになったとき」とあるが、大英図書館7628写本など初版の写本に従い、「オゴデイ・カアンがカアンになったとき」とする。そのほか、Rawshan のテキストで [] をつけて補った部分は、第二版に欠落している単語などを初版にもとづき補ったものである。その校訂に従う。

だしい。しかし、また我々にとって、獲得した種類からすれば、これを惜しむのは、なんとわずかなものでしょう。我々もカアンのものです⁵⁾。彼が支配者です。彼が正しいと思うことを命じているのです」と。彼女が賢明かつ有能にもそのようにおっしゃったので、アミールたちはみな沈黙した。このことが理由で、コデンとトルイ・カンの息子たちの間に友好関係が生じ、オゴデイ・カアンの一族とモンケ・カアンが敵対したときにも、コデンは背かなかった。そのため、説明したように、モンケ・カアンも、彼らの軍を分配したときに、コデンのものは、彼に確定した。(『集史』チンギス・カン紀, Rashid/Rawshan, pp. 612-613; Rashid/Topkapı 1518, fol.132b; Rashid/British Library 7628, fol.542b; Rashid/Thackston p. 282)⁶⁾

- 5) ここは大英図書館7628写本では、「我々もチンギス・カンのものです」とある。Rawshan テキストはこれをとらず、トプカプ・サライ1518写本など第二版により「我々もカアンのものです」としている。この校訂に従う。
- 6) ほぼ同様の出来事を伝える記事がトルイ・カン紀にもあるが、そこではスルドス族の2千戸のことだけが述べられていて、スニト族の1千戸への言及がない。「オゴデイ・カアンの治世に、トルイ・カンの死後、トルイ・カンと彼の息子達に属する軍全体の中から、自分の一存で、一族に相談することなく、スルドスの2千戸を、自分の息子コデンに与えた。イエケ・ノヤンに関係する～のような千戸と万戸のアミールたちは、ことが起きた時に、一緒になって、ソルカクタニ・ベキ、モンケ・カアンと彼らの一族の御前で次のように申し上げた。「このスルドスの2千の軍は、チンギス・カンのヤルリクの命令によって、我々に属しています。カアンがコデンに与えようとしています。我々はどうして黙認して、チンギス・カンの命令に違反するのですか。カアンの御前で申し上げましょう」と。ソルカクタニ・ベキが回答された。「あなたたちの言葉は正しい。しかし、我々にとって、相続し獲得した財からすればわずかなものではないか。いかなる費用についても必要に迫られているものはない。軍も我々もすべてカアンのものである。彼は命令することをよくわかって命令している。命令は彼の命令であり、我々はそれに従うのだ。」ソルカクタニ・ベキがそのようにおっしゃると、アミールたちは沈黙し、それを聞いた誰もが賛成した(『集史』トルイ・カン紀, Rashid/Rawshan, pp. 792-793; Rashid/Topkapı 1518, fol. 180a; Rashid/Boyle, pp. 169-170)。

(4) 長子モンケの即位実現のための交渉

オゴデイの死後、上述のように、トレゲネ・カトンの意向により、長子グユクが即位した。このとき、ソルカクタニ・ベキは、まっさきにクリルタイの場所に到着し、甥グユクの即位を支持した (Rashid/Rawshan, p. 805; Rashid/Boyle, p. 180)。ところが、その数年後、グユクは病死した。

最終的に、クリルタイで長子モンケの即位が承認され、モンケが第4代大カアンとなったが、クリルタイ開催に至るまでにソルカクタニ・ベキが試みたのは、バトゥの支持を得ることである。トルイ家とジョチ家の関係はよく、ソルカクタニ・ベキにとってバトゥは味方であったが、そのバトゥはクリルタイに参加しない可能性が高かった。その少し前に、南ロシアにいたバトゥは、そこでクリルタイを開催しようとしたが、皇子たちが反対して実現しなかった。そこで、次の史料4にあるように、ソルカクタニ・ベキは、バトゥの支持を得てクリルタイを有利に進めるために、モンケに南ロシアに行ってバトゥに会うように促した。モンケは彼女の言葉に従って南ロシアまで行き、バトゥに会ったのである。バトゥは、モンケがカアンにふさわしいことを理解し、モンケの即位を了解した。一族の年長者(アカ)であるバトゥが積極的にモンケの即位を支持したため、ソルカクタニ・ベキはクリルタイを有利に進めることができ、モンケの即位が実現した。もともとトルイ家とジョチ家は関係がよかったのは確かであるが、ソルカクタニ・ベキがモンケを南ロシアまで行かせて根回しをしたところに、帝国内の深刻な対立を回避してモンケの即位を実現したいと考えた彼女の姿勢が表れている。

(史料4) バトゥは、グユク・カンの死去の時、足の痛みを患っていた。彼は、すべての息子(皇子)達をここに来させてクリルタイを開催し、能力があり我々が良いと思う者を即位させるために、アカ(=一族の年長者)のやり方により、すべての方面へ諸親族への通知として次々と使者を派遣した。

オゴデイ・カアン、グユク・カン、チャガタイの息子達は拒否した。

なぜなら、もともとユルトとチンギス・カンの王座は、オノンとケルレンであり、我々にとって、キプチャク草原に行くことは義務ではないからである。

皇子たちは一致団結して文書を出すために、ハージャ、ナク、クンクル、タガイと、カラコルムのアミールであったテムル・ノヤンを、自分たちの代理として派遣して、次のように伝えた。「バトゥは、すべての息子（皇子）たちにとってアカであり、彼の命令は、全ての人にとって効力がある。私たちは、彼が正しいと思うことから、いかなる理由でも、違うことはしない」と。

その後、ソルカクタニ・ベキがモンケ・カアンに言った「息子（皇子）たちはアカに背いて彼のもとに行かなかったが、あなたは、兄弟とともに行って、彼を訪問しなさい」と。モンケ・カアンは、母親の指示に従って、バトゥの御前へと出発した。彼がそこに到着して、面前に立った時、バトゥは彼の顔に成熟と才能の印を見て取り、言った「皇子たちの中では、モンケ・カアンがカンとしての能力を有している。というのは、彼は人生の良きも悪きも見て、いろいろなことの苦さも甘さも経験し、幾度も諸方面に軍隊を率いたからである。（後略）」と。（『集史』モンケ・カン紀, Rashid/Rawshan, p. 824; Rashid/Topkapı 1518, fol.186b-187a; Rashid/Rampur 1820, pp. 91-92; Rashid/Boyle, pp. 200-201）

(5) 死去とその影響

モンケの即位の後、モンケのオゴデイ家とチャガタイ家に対する激しい粛清があり、モンケの即位を支持しなかったオゴデイ家とチャガタイ家の者たちが処刑あるいは流罪となった（杉山 1996, pp. 99-100）。史料3に書かれているように、オゴデイ家の中でもソルカクタニ・ベキに恩のあるオゴデイの第2子コデンは、オゴデイ家とトルイ家が対立した時もモンケとの関係を維持し、即位後にモンケがオゴデイ家を解体した時にコデンが所

有する千戸はそのまま認められたのである。このように、ソルカクタニ・ベキの裏での努力が、帝国内の対立の緩和に貢献していた。しかし、ソルカクタニ・ベキは、『世界征服者の歴史』によると「イスラーム暦649年ズー・アル＝ヒッジヤ月」すなわち1252年8－9月に死去した (Juwayni/Qazwini, vol. 3, p. 9; Juwayni/Boyle, p. 553)。

その後、よく知られているように、1260年、彼女の息子のクビライとアリク・ブケの兄弟間で帝位継承争いが起こり、帝国を二分する戦争となった。モンゴル帝国は、帝位継承の順番が決まっておらず、クリルタイで議論してカアンを決める仕組みになっている。しかし、そのやり方は争いが起きやすく、モンゴル帝国にとって帝位継承は最大のアキレス腱であった。

上述のように、ソルカクタニ・ベキは、チンギス・カン家内部の対立や敵対をできるだけ回避しようと努力していた。そのソルカクタニ・ベキが死去した後に、10年もしないうちに彼女の息子二人が兄弟で帝位継承争いの戦争を起こしたのである。この事実は、ソルカクタニ・ベキを失ったことが、チンギス家にとっていかに大きな損失であったかをよく物語っている。

(6) イスラーム教徒の支援・保護

ソルカクタニ・ベキはキリスト教徒であったが、イスラーム教徒の支援・保護にも尽力した。中央アジアのブハラにマドラサとハーンカーを設立するために、ソルカクタニ・ベキが資金を提供したことはよく知られている。また常にイスラーム教徒の貧者に施しを行ったという (Juwayni/Qazwini, vol. 3, pp. 8-9; Juwayni/Boyle, p. 552-553; Lambton 1988, p. 324; De Nicola 2017, p. 211; Jackson 2017, p. 178; De Nicola 2020, p. 277)。このことは、イスラームの歴史家がソルカクタニ・ベキを絶賛する理由のひとつであると言われている。

上述の3人の女性の事例から、モンゴル帝国時代の統治者集団内におい

て女性の置かれていた立場がある程度見えてくるだろう。モンゴル帝国のカトンは、一時的に権力を掌握し政治を動かすことはあったが、現代的な意味での女性の地位の高さがあったのではなく、死去した統治者の妻であり、その後継者候補の母親であることが権力の根拠であったと考えられる。それは、モンゴル社会における母親の地位の高さを反映している可能性が高い。また、トレゲネ・カトンやオルクナ・カトンのように、一時的に実質的に権力を掌握し、統治者として統治をおこなった女性もいたが、ソルカクタニ・ベキのように、誰もが一目置く存在として政治的な影響力を持った女性もいた。チンギス・カン一族内の帝位継承争いは帝国のアキレス腱であり、その緩和に宮廷女性が果たした役割はもっと評価することはできるであろう。このように限られた条件下での女性の政治的活躍ではあるが、この時代の他の民族に比べれば、モンゴル帝国の宮廷の女性は政治的に活躍する機会が多かったと言えるのかもしれない。

ま と め

モンゴル帝国の歴史において、カトンが政治に関与した事例が少なからず見出すことができ、モンゴル帝国の宮廷には政治を動かすことができる女性が存在した。ただ、それらの事例は、宮廷内のすべての女性の政治的地位が高かったことを意味するのではなく、特定の地位にあった女性に政治を動かす機会があったと考えた方がよいだろう。具体的には、統治者の死後、寡婦となったその統治者の妻のうち、後継者候補の母親に当たる女性が、一時的に権力を掌握するなど高度に政治的活動をすることが許され、後継者が選ばれる際には選考に影響力を及ぼすことができたのである。これらの事例は、いずれも寡婦になった女性が母親として息子のために政治に深くかかわった事例であり、モンゴル社会における母親の地位の高さを反映している可能性が高い。

また、モンゴル帝国の歴史において、チンギス・カン家内で頻発した帝位継承争いは、帝国を弱体化させた要因の一つであり、その争いの回避は、

チンギス・カン家にとって重要な課題であったと考えられる。したがって、モンゴル帝国の歴史においてカトンが果たした役割を考える場合、トレゲネ・カトンやオルクナ・カトンのように権力を一時的に掌握した女性だけでなく、ソルカクタニ・ベキのように、チンギス・カン家内の帝位継承争いなどをめぐる対立を緩和するために努力した女性の政治的役割も積極的に評価すべきであろう。

<史 料>

(1) 校訂テキスト・訳注

Rashid/Blochét: E. Blochet (ed.), *Djami el-Tévarikh par Fadl Allah Rashid ed-Din*, Tome II, Leyden-London, 1911.

Rashid/Rawshan: M. Rawshan & M. Mūsawī (ed.), *Jāmi' al-Tawārīkh*, 4 vols., Tehran, 1373/1994.

Rashid/Boyle: John Andrew Boyle, *The Successors of Genghis Khan*, New York: Columbia University, 1971.

Rashid/Thackston: W. M. Thackston, *Rashiduddin Fazlullah, Jamī'ut-Tawarikh: Compendium of Chronicles, A History of the Mongols*, 3 vols, Cambridge, Mass.: Harvard University, 1999.

Juwayni/Qazwini: *The Ta'rikh-i-Jahān-Gushā of 'Alā'ud-Dīn 'Aṭā Malik-i-Juwaynī*, ed. by Mīrzā Muḥammad Qazwīnī, 3 vols., London-Leyden, 1912–37.

Juwayni/Boyle: *The History of the World-Conqueror by 'Ala-ad-Din 'Ata-Malik Juvaini*, tr. by John Andrew Boyle, 2 vols, Manchester, 1958. Rep. *Genghis Khan: The History of the World-Conqueror by 'Ala-ad-Din 'Ata-Malik Juvaini*, tr. and ed. by John Andrew Boyle with an introduction by David O. Morgan, 1 vol., Manchester, 1997.

(2) 『集史』写本

Rashid/Топкари 1518 : トプカプ・サライ博物館付属図書館 Топкари Сарayı Müzesi Kütüphanesi, MS. Rewān köşkü 1518.

Rashid/British Library 7628 : 大英図書館 British Library, MS. Or. Add. 7628.

Rashid/Российская PNS46 : ロシア国立図書館 Российская Национальная Библиотека, Санкт-Петербург, MS. PNS46 (旧サルティコフ・シュチェドリ ン公共図書館写本番号2458).

- Rashid/Rampur 1820 : ラーンブル・ラザ図書館 Rampur, Raza Library, MS.F1820.
Rashid/Узбекистан 1620 : ウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所
Институт Востоковедения Академии Наук Республики Узбекистан (Abu
Rayhon Beruni Institute of Oriental Studies), Ташкент, MS. 1620.

《参 考 文 献》

- Allsen, Thomas T. 1987, *Mongol Imperialism: The Policies of the Grand Khan Mongke in China, Russia, and the Islamic Lands, 1251–1259*, Berkeley: University of California Press.
- Biran, Michal 1997, *Qaidu and the Rise of the Independent Mongol State in Central Asia*, Richmond, Surrey: Curzon.
- Biran, Michal 2009, “The Mongols in Central Asia from Chinggis Khan’s invasion to the rise of Temür: the Ögödeid an Chaghadaid realms” in Di Cosmo et al. 2009, pp. 46–66.
- Biran, Michal et al. (eds.), 2020, *Along the Silk Roads in Mongol Eurasia*, California: University of California Press.
- Broadbridge, Anne 2018, *Women and the Making of the Mongol Empire*, Cambridge: Cambridge University Press.
- De Nicola, Bruno, 2017, *Women in Mongol Iran: The Khatuns, 1206–1335*, Edinburgh: Edinburgh University Press.
- De Nicola, Bruno, 2020, “Padshah Khatun,” in Michal Biran et al. 2020, pp. 270–289.
- de Rachewiltz, I, 1981, “Some Remarks on Töregene’s Edict of 1240,” *Papers on Far Eastern History*, 23.
- de Rachewiltz, I, 1999, “Was Töregene Qatun Ögödei’s “Sixth Empress”?” *East Asian History* 17/18.
- Di Cosmo, Nicola et al. (eds.), 2009, *The Cambridge History of Inner Asia: The Chinggisid Age*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Gonnella, Julia et al. (eds.), 2017, *The Diez Albums: Contexts and Contents*, Leiden: Brill.
- Jackson, Peter, 2017, *The Mongols and the Islamic World from Conquest to Conversion*, New Haven: Yale University Press.
- Kadoi, Yuka, 2017, “The Mongols Enthroned,” in Gonnella et al. (eds.) 2017, pp. 243–275.
- Kim, Hodong, 2005, “A Reappraisal of Güyüg Khan”, in Reuven Amitai, Michl Biran (eds.), *Mongols, Turks, and Others: Eurasian Nomads and the Sedentary World*,

- Leiden: Brill, pp. 309–338.
- Komaroff, Linda (ed.) 2006, *Beyond the Legacy of Genghis Khan*, Leiden: Brill.
- Lambton, Ann K. S., 1988, *Continuity and Change in Medieval Persia*, New York: State University of New York Press.
- Melville, Charles, 2017, “The Illustration of the Turko-Mongol Era in the Berlin Diez Albums, in Gonnella et al. 2017, pp. 221–242.
- Pfeiffer, Judith, 2014, ““Not every head that wears a crown deserves to rule”: Women in Il-Khanid political life and court culture,” in Ward 2014, pp. 23–29.
- Uno Nobuhiro, 2009, “Exchange-Marriage in the Royal Families of Nomadic States”, in *The Early Mongols: Language, Culture and History*, Bloomington: Indiana University Press.
- Ward, Rachel (ed.), 2014, *Court and Craft*, London: The Courtauld Gallery.
- 蔡美彪, 1989「脱列哥那后史事考辨」『蒙古史研究』第3輯。再録：蔡2012, pp. 286–316。
- 蔡美彪, 2012『遼金元史考索』中華書局。
- 宇野伸浩, 1993「チンギス・カン家の通婚関係の変遷」『東洋史研究』52–3（中国語訳：「弘吉剌部與成吉思汗系通婚關係的變遷」『蒙古学信息』67, 1997。
- 宇野伸浩, 1999「チンギス・カン家の通婚関係にみられる対称的婚姻縁組」『国立民族学博物館研究報告別冊』20。
- 小野 浩, 2010「ディルシャード・ハトンとそのファルマーン——14世紀イランにおける女性の発令書」『女性歴史文化研究所紀要』18。
- 杉山正明, 1996『モンゴル帝国の興亡』上巻（講談社現代新書），講談社。
- 杉山正明, 1997「モンゴル帝国の成立」『中国史3』（世界歴史大系），山川出版社。
- 杉山正明, 2004『モンゴル帝国と大元ウルス』（東洋史研究叢刊65）京都大学学術出版会。
- ドーソン, 1968『モンゴル帝国史2』（東洋文庫128）平凡社。
- 野沢佳美, 1988「モンゴル太宗定宗期における史天沢の動向」『立正大学東洋史論集』1。
- 本田実信, 1953「チンギス・ハンの千戸」『史学雑誌』62–8。再録：本田1991, 「チンギス・ハンの千戸制」 pp. 17–40。
- 本田実信, 1991『モンゴル時代史研究』東京大学出版会。
- 松田孝一, 1980「フラグ家の東方領」『東洋史研究』39–1。
- 付記 本稿は2020年度広島修道大学ひろしま未来協創センターの調査研究費による研究成果の一部である。